

日本仏教徒懇話会第68回懇談会

津田講師は五ページに亘るレジュメを基に予定時間を超過して、専門的立場からオウム真理教の教義と日本の仏教の実情について語られた。講話の内容はかなり難解で、とくに専門用語の知識に乏しい出席者にとって消化不良の観があった。本紙の編集部も、その要点をとりまとめる能力に欠けるため、後出の講述要旨は、津田講師に事後にまとめて頂いた。

日本仏教徒懇話会は昨秋十月六日、わが国が当面する国内および国際的重要問題の解明をテーマに、第六十八回懇談会を仏教伝道センター八階ホールで開催した。参加者約五十名、定刻午後二時、関根事務局長の会務報告に続いて仏教聖典を聴聞した後、まず津田真一先生より「オウム真理教とこれからの仏教」と題し、ついで森一久先生より「核問題をめぐる動きとその背景」と題して講述が行われた。



▲森一久講師



▶津田真一講師



▲熱心に傾聴する参加者

森講師の講話は、大量無差別殺戮手段としての核兵器の宿命と人間の関わりについての本質的な問題を究明し、ノーベル賞学者たちの提唱したバグウォッッシュ会議の精神の実現のため、仏教徒の奮起を望むことを結論とした、きわめて明快な内容のものであった。森一久氏ご自身、広島での原爆被爆者の一人である。講話のあと質疑応答があり午後四時半閉会となった。

当面する重要問題の解明へ
オウム真理教について 津田真一 東方講師
核問題について 森一久 原産専務理事

佛教徒フォーラム

題字は土光敏夫氏筆

発行所
日本仏教徒懇話会
〒107 東京都港区南青山
2-22-14 フォンテ青山910
電話 03 (3478) 4528
取引銀行 第一勧業銀行青山支店
非売品

木内信胤先生を偲ぶ

「十二月五日の会」

盛会裡に終始

平成七年十二月五日、前会長木内信胤先生の二年めの命日に当るこの日、かつて先生の指導を頂いた関係諸団体の有志により先生を偲ぶ「十二月五日」の会が日本工業倶楽部で開催された。

国語問題協議会、日本仏教徒懇話会、株式会社カレント、新農村建設同志会、法華会などの有志が相諮って企画し、宇野精一先生を有志代表として関係方面に呼びかけたもので、木内先生の遺徳を偲ぶ百人が参加、午後三時より二時間余にわたって、熱の籠ったスピーチが相次ぎ、盛会裡に終始した。なおこの「十二月五日の会」は来年も同じ会場で開催することが予定されている。

在り方について、有志の間で検討が進められている。



▲有志代表の宇野精一先生

▼「十二月五日の会」



日本仏教徒懇話会

今後の活動についてアンケート

——十五周年の節目にあたって——

本紙の前号で報じたとおり、日本仏教徒懇話会はこの一月で発足十五周年を迎えたが、この機会に当会の今後の活動について、全会員ならびに講師諸先生から意見を求めるためのアンケートを実施した。発信総数一八〇のうち一月末日までに着信した七〇の回答の概要は次のとおりである。

一、十五周年の行事の可否とその内容について
(イ)とくに必要ない(8)
(ロ)記念講演会を開催(45)
(ハ)会報特別号を発行(27)
(ニ)作文募集(18)
(ホ)その他(5)
二、今後の活動について

(イ)聞法(講演会、懇談会など)(52)
(ロ)仏教研究(講習会、セミナーなど)(26)
(ハ)社会活動(政財界への呼びかけ)(22)
(ニ)関係諸団体との協力(19)
(ホ)その他(5)

三、当会への批判やご意見

○努力に敬意(4)、一層の活動を望む(8)
○会報が重要、政財界へも送れ(2)
○若年層会員を増やす施策を(3)
○国際的な活動の在り方を考究すべし
○財政面の余裕が必要
○これからは心の時代、仏教の出番
○「偉大な精神革命」としての仏教の実践を
○ダンマが通徹した人の話を聞きたい
○社会活動が必要、だがその実力があるとは思えない。聞法中心が停滞の因。

オウム真理教とこれからの仏教

東方学院講師 津田 眞一 先生 講述

私事になりますが、私は今年(一九九五年)の一月十日から三月二十日までロンドンに行

っておりまして。ロンドン大学の東洋アフリカ研究所(SOAS)に故沼田恵範先生の仏教伝道協会の寄附講座がありまして、そこから招かれたのです。オープニングの公開講義もどうやら済みまして、さあ明日から講義に入ろうという十六日の夜中に東京の留守宅に電話を入れますと、たつた今神戸で大地震が起ったところだということで、大変吃驚しました。実はロンドンへ発つ前夜、夕食の時に「三日

ぐらい後に大地震が来るぞ」と宣言して来たばかりのところであつたからです。その時は子供たちが本気で不安がりましたので、「じゃ、ひとついいことを教えておいてやろう。

いま、次の瞬間にも地震が来ると思つて、その瞬間だけは地震は来ない。だからお父さんの留守中はいつも地震のことを忘れないように」と言つたのですが、私が急にそんなことを言い出したのには訳がありました。

その一日二日前、私が夜中に何気なく茶の間のテレビのスイッチを入れましたところ、それがいわゆる深夜番組だったので。寒いさ中のしかも深夜に若い女性を裸同然の水着姿にし、若手のタレントたち(もちろん男の...)がそのお尻にパチンコの玉を押し込んでいくつまでキープできるか、という競争なのですね。私はその時、瞬間的に「ああ、これは、

地震が来るな」と感じたのです。

後になって思い返してみますと、私はその時、多分そこにヒュブリス、ギリシャの賢人たちがいつもそれを戒めていたところの人間の傲慢を感じたのでしようね。いや、ヒュブリスならまだいいのです。ヒュブリスとは、「われわれ人間は自由なのだ。何でもすることができのだ」と考えることです。自発的に悪を作すことすらできるのだ、というのですね。しかし、これならまだしもなのです。

人間が敢えて悪を作せば必ず罰せられます。まず、それが他者に及ぼす害の故に人間の社会の内で罰せられ、そして次に、その傲慢の故に神々によって罰せられます。しかし、それでもいいんだ、という精神ですね。自らの人間としての尊厳のためなら、神々の審判の前にも立とう、甘んじて没落していこうという覚悟、そこに人間の高貴、美しさということがあるからです。しかし、この深夜番組のような場合はどうでしょう。先日、新聞の投書欄でどなたかが、最近のテレビは人間をオモチャにしている、と言っておられるのを読みましたが、全く同感です。テレビ局という閉鎖社会の中で上位の者が、自らの安全な位置から下にいる者に向つてその小さな権力を恣意的に振つてそれを楽しむ。プロデューサーやディレクターが、売り込むためにはどんなに恥かしいことでもしなければならぬ弱い立場

のタレント予備軍の男女をオモチャの様に弄んでその種の狂愚を演じさせ、自らは恥じることとてない……。ここには人間の誇りとか没落への覚悟とか、その様なものは最初から見当りません。これは最早ヒュブリスとすら言えない、ただ卑しい、陰微なサディズムがあるだけです。

しかし、これはなにもテレビの世界だけに限ったことではありません。これは今日の日本社会のあらゆる局面に共通に見られる傾向として、私たち現代の日本人の精神そのものなのではないでしょうか。現にそういう精神に対するアンチテーゼとして日本的社會の外に原始仏教的な出家集團(平等なメンバーの和合衆)として発足した筈のオウム真理教でさえこの精神から例外であり得ず、いつの間にか、その麻原氏を頂上として正大師とか正悟師とか、はてはサマナとか一般在家信者とかいふその露骨な位階制度が示すように典型的に閉鎖的タテ社會の構造のものとなつてい

るのです。そしてそこを支配している精神が上位のものが下位のものをオモチャにする例のサディズム、しかし今度は最早陰微ですらない、おつぱらの、理由づけられたサディズムであつたことは、連日のオウム報道を通じて皆様すでによく御存知の通りであります。要するにオウム真理教というのは今日の私たちの精神の忠実な縮図なのですね。

で必ずしも不安ではない、むしろ幸福なので

す。「これが人生というもののさ」などと達観していたりします。しかし、私のこの観測が当たっていますなら、それこそは(アーラヤのニヒリズム)、全ての仏教研究にとつての根本資料であるところのパーリ『律藏』『マハーヴァツガ』において、それが現成する時「この世界は敗壞するであろう」と明らかに予言されているところのかの恐るべきニヒリズムなのではないでしょうか。この(アーラヤのニヒリズム)というのは私の造語なのですが、それがなぜ「アーラヤの」なのかと申しますと、それはこの資料において釈尊が私たち人間の本性を道破されたところの

「此衆生は阿頼耶を楽しみ、阿頼耶を欣び、阿頼耶を喜ぶ」(五・二)

という言葉に由来するものであるからです。阿頼耶(alaya)というのは後の唯識説で阿頼耶識をいう場合のそのアーラヤと同じものですが、ここでは流れ、ないしはその流れに乗って流れること、という程の意味です。ここでは世界の本質としての(存在)Sattaの觀念——私は世界という觀念を(中性単数のDharma)、その世界の内実をなす衆生、すなわち私たち個々の人間の存在を(男性複数のDharma)、そしてその世界と人間との存在論的根柢をなすこの(存在)の觀念を(女性単数のDharma)という言葉で表します——が一種の生命的な流れとして理解されています。釈尊はここで人間というものはその全宇宙的な生命に根源的に信頼し、その自然の流れに身を委ねて生きてゆく、すなわち流れてゆくことに喜びを感じている存在なのだ、というほどのことを言われたのです。

全宇宙的な根源的な生命の流れに身を委ねて自然に生きていく……。こう申しますと何だか非常にいいことのように思われます。そのどこが悪いんだ、それがどうして二ヒリズムにつながるんだ、と言いたくなります。しかしブッダ(釈尊)の表向きの立場(実はブッダの教えには裏があるのです。その裏、というのが、後に申し上げます「開放系」の思想)なのですから、このような生き方は否定されるべきものなのです。それは、ブッダの認識するところ、その生命的な流れとしての「存在」は無明ないし渴愛に他ならず、それに支えられて存立しているこの世界内における私たち人間の生は畢竟無意義にしてただひたすら苦であるところの輪廻であるからです。私たちのこの現実世界における人間の生には何の意義もないし、またいくら輪廻しても決して新しい展望は開けない、新しい価値も生じない、ただ苦しいだけだ、だから須く出家し、現法に(この一生を目的地として)梵行(性的貞潔を守ること)を修してこの輪廻の世界から解脱し涅槃の寂滅に帰すべきで、それが本当の意味での樂つまり幸福ということなのだ、というのがブッダのその表向きの教えです。「寂滅為樂」の立場ですね。ついでですが、オウムは「神聖行」と称してこの梵行ということを大変重要視します。なぜ「神聖行」と言うのかと申しますと、彼らは多分、そのbrahmacariyaというパーリ原語の英訳を見てそれをそう訳したのです。brama-に対してパーリ辞書にはholy, sacredという訳語が与えられているからです。そして彼らは「出家信者」に大変厳格な禁欲的修行を課します。これはブッダの表向きの立場

からするなら、正しいですね。しかし、彼らはブッダの裏の立場は知りません。もっとも、これは当然のことですね。彼らは非常によく仏教の勉強をしています。それは所詮素人勉強で、書店で売っているかぎりの仏教書・仏教研究書を買ってそこに書いてあることをつぎはぎして彼らなりの教義体系を作りあげるので、その市販の仏教にはこの裏の思想は全く知られていないからです。さらにいうなら、この「開放系」の神は「一人」にその「開放系」の神から直接に示されたものであるからです。

私がこの様なものの言い方をいたしても、皆様にはどうか私を誇大妄想などと思いにたらないようお願いいたします。実を申し上げますと私は仏教の世界ではこれまでずっと誇大妄想の気狂いだと思われてきたのですが……。これは私の妄想ではなく、「開放系」の思想」というのは事実、そういうものなのです。現に私がいま「二人」と申ししたのは、『歎異抄』の結文のところに、他ならぬ親鸞聖人がつねづね「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と言っておられた、と書いてあるからです。

私は今から何年前か、昔から知っていた筈のこの言葉に改めて気づき、喜びと畏れに文字通り身毛竪立したものです。私はその直前、或る非常な苦勞の末突然にその神の觀念におち当り、その余りの異様に、これこそは悪魔なのではないかと我ながら恐しくなっていました。その「開放系」の神が、ただしその一面においてではありますが、そこにおいて親鸞聖人によって明らかに道に当てられていたからです。日本浄土教伝統の阿弥陀は、そして、

密教の法身大日如来も、『法華經』の久遠実成の釈迦如来も、さらに言えばインドの大神であるヴィシヌ神も、またオウムが自らそれを崇拝するというシヴァも、果てはユダヤ教のエホバやキリスト教の神(God)ですら、この唯一の「開放系」の神、それぞれにその正面なのです。また、この親鸞聖人の「一人」の言葉を親鸞聖人の思想の核心、いわゆる「可能性の中心」に向けて正しく了解して、たのは、管見いたしますところ西田幾多郎博士ただ一人なのですが、その西田先生はその最晩年、神と人との「逆対応」ということを道われまして、それを「我々の自己の」が、永遠の過去から永遠の未来に互る人間の代表として神に対する」とことなのであるとされ、そして、この事態というものが親鸞聖人の件の「一人」の言葉なのである、と言っておられるのです。

私がかう申しますと他人から「じゃお前は自分がその代表だ」と尋ねられそうですが、仮りにそう尋ねられたら、「そうです」と答えざるを得ないのです。例えば、私の「開放系」の思想」というのは、その入口を次の様な枠によって示されます。

A…「汝は自ら汝の父である」
しかも、
B…「汝は自ら汝の父になるべきなのである」

私はこれを「開放系」の命題」と称し、それを敢えて(依然として)一半の自己諧謔を込めて「人類六千年の真理」とあると言っていますが、これは決して単なる思いつきや当てずっぽうではありません。私自身のそれまでの実証的な仏教学すなわち「閉鎖系」の仏教学

において事実として獲得されたものです。A命題は私がそれをタントラ仏教のピークに位置づける『ヘーヴァジュラ・タントラ』の末尾において、このタントラ本来の行法、すなわち、今回のオウム事件で有名になった「ボワ」(bowa)の行法(これはマハムドラーと称する特殊な女性との瑜伽によって大乘の菩提心の転昇の過程を身体の中に象徴的に再現する左道的な行法ですが、ただし、オウムの理論的後見人である中沢新一氏の言われるような、意識を頭のとっぺんから空中に飛ばす、という事態は含んでおりませんし、ましてや他人を「殺す」ことなどではありません)を自己否定するかたちで提示される「第四灌頂」の真理の命題に他なりません。この「マハムドラー密教」(中沢氏)はオウムの実践の中心、いや、最高位置を占めるものです。が、少くともそれはインド本来の密教の思想史的な流れの中では否定された立場なのです。

次にB命題ですが、『ヘーヴァジュラ』末尾におけるこのA命題の提示を契機として密教思想史は更に展開します。そこに成立したのが私が昔、それを「F」論文のテーマとして専門に研究したサンヴァラ系密教という体系なのですが、そこにおいては「ボワ」の無時間的な即身成仏の構想から一転して、丁度ブッダの「現法的梵行」に見合うかたちでの(一生、死ぬまで苦しい聖地巡礼を続ける)という行の觀念が復活するのです。そしてこの行の觀念の復活とともに密教の思想史の展開は突如としてその歩みを止め、そこに一種の定常状態を現出します。この思想史的事実が私の仏教の全実証性の唯一確実の出発点なのです。それはともかく、この復活した

行を、私はA命題を受けて、「しかも、(汝は自ら汝の父になるべきである)」という命題を前提とするものとして理解したわけだ。

ところで、*pita le tvam asi svayam* というそのサンスクリット語から考えるとよりはっきり解るのですが、上のA命題はウパニシャッドの大格言「汝はそれである」*at tvam asi* のヴァリエーションです。また、私たちがB命題から直ちに思い浮べるのは、ピンダロスの或る箴言の最初の三語をとってきてニーチャエがそれを生涯のモットーとした「汝は汝がそれであるところのものになるべきである」*gnoi oios esti* です。では、私の「開放系の命題」は結果的にこれら二つの有名な命題をとってきて、それらをちよつとお化粧直しをして二つ並べただけなのではないか。違います。私の「開放系の命題」がはじめて、あるいは、私「一人」だけが、それらがより根源的な事態において不可分の関係にあるものであることを、自覚的に示し得ているのです。

いや、それだけではありません。上に申しましたとおりこれらの命題は、それだけでは内容空虚な枠組みにすぎないのです。例えば、ニーチェのこのモットーは哲学者や心理学者によってしばしば論じられるのですが、彼らは必ずこの「汝がそれであるところのもの」*oios* を「本来の自己」という言葉で置き替えただけで済ませてしまうのです。しかし「本来の自己」とは一体何なのでしょう。しかしこそが問題なのではないでしょうか。しかし私の「開放系の思想」、さらに言えば「開放系の神学」は、その基礎をなす「開放系の仏教」に由来する実証性によって、それに一つの現実的な内実を与え、それを私たち自身の思想

すなわち「(生の可能性の制約)へと齎らすことができるのです。これは「汝の父となるべきである」の場合と同じです。そしてもう一つ、この私「一人」の「開放系の仏教」は今日の課題の「これからの仏教」の一つの方向を示すものである筈なのです。現にオウム真理教をカルト性というその「本質」に遡って根柢的に批判し得るものは、私の「開放系の思想」を措いては他にない筈なのです(カルトは批判し去られねばならないのです)。

繰り返し申し上げますが、私はこの様なことを誇大妄想で言っているわけではありません。また、私の頭脳や知力を示さんがためでもありません。私は物ごとくついて以来、私の知力に幻想を抱いたことなどは一度もありません。私はその程度をよく認識しております。端的に言ってそれは凡庸の一語に尽きます。しかし、それと同時に、私は私の認識が「一人」的に根本的な事態に触れ得ていることを疑い得ないのです。ですから私はそれだけがただひとり、その凡庸な私にかかる認識が出現するという、この様な信じ得べからざる奇蹟を出来せしめ得るところのその「開放系の神」の存在を予想せざるを得ないのだという。ただそのことだけを申し上げたかったのです。いや、話を「アーラヤのニヒリズム」に戻しましょう。そのような生命の自然の流れに即して生きるという生き方がなぜニヒリズム、それも世界を敗壊せしめるという危険なニヒリズムになるのか、ということですが、それは次の様な事態にもとづいております。悟りを開いた釈尊は、しかしながら、その悟った真理(法)を人々に説かずに入滅してしまおうと考えます。いわゆる「説法躊躇」です。

そしてその理由が「衆生は阿頼耶を楽しむ」、しかしながら自ら悟ったその真理は「世流に逆らう」すなわち、彼らにその本然の性向に意志的に逆行すべきことを命ずるものである、したがってそれは彼らに理解される筈がない、仮令頭で理解しても彼らがその命令に従う筈はない。だから説いても無駄骨折りになるだけだから説くのはやめよう、というのです。ところが、この娑婆世界の主・梵天はブッダのこの意向を知りまして大変あわてます。彼は「ああ、(それでは)この世界は敗壊してしまふ、この世界は敗壊してしまふ」と言い

つつ急ぎブッダの前に行き、しつこく説法を勧請します。ブッダははじめはそれでも応じなかつたのですが、梵天が繰返し嘆願しますのてついにその請いを容れて説法の決心をします。こうして仏教が世に現われ世界は敗壊せずに済んだ、というわけですね。ところでここに一つの謎があるのです。それはこういうことです。ブッダが世に現われる以前にも、この娑婆世界はずっと存続して来た筈です。それがなぜ、ブッダが今その教を説かないなら「世界は敗壊してしまふ」のでしょうか。私がこの謎の存在に気づいたのは今からもう十年も前のことですが、その時私はそれまで私たちがそれが仏教だと思っていたその仏教の背後に、なにかとんでもないものが隠れていることを感じたのです。さて、こういうわけでブッダの教は説かれ、この娑婆世界は敗壊しないで済んだわけですが、その仏教が無くなるなら、ブッダが私たちに教えたかの生命の自然の流れ(アーラヤ)に逆行するヴェクトルが改めて無に帰したとき、世界は敗壊する道理なのです。私は例の深夜番組を見た

とき、そのニヒスティックな愚かさ、つまり現前の人間を超えた超越への眼差しも、また没落への覚悟もあらばこそ、当の人間の尊厳をも喰うそのニヒリズムの徹底において「アーラヤのニヒリズム」がいよいよ現成してきたのを感じたのです。では、今やこの世界は敗壊するのか、と申しますと、そうでもないのです。私の神は、多分、依然として世界(世界はその神の「身体性と生命」*Leiben und Leben* なのです)の存続を望んでいます。だからそれは私たちに警告を発してくる筈なのです。だから私は、瞬間に、「これは、地震が来るな」と感じたのです。

しかし、電話でその地震が本当に起ったことを知ったとき、私もさすがに吃驚はしました。しかし、本当に心配をしていましたもの。ですから、それが東京でなかつたことに、正直申しまして、ホツとしました。私の妹一家が神戸に住んでいるのですが、彼らのことは意外に気にかかりませんでした。新築のマンションに入居したばかりですし、その時間は皆自宅で寝ていた筈ですから、生命に別状は無からうと判断したのです。しかし、実は彼らのことを心配する余裕すらなかつたのです。私はその日から講義に入つたのですが、すでにその準備で追いまくられていたので、私は週に仏教思想史の講義と『華嚴経』のセミナーを一回ずつ、もちろん英語でやるわけですが、事前の約束で、喋ることを全部タイプにして配布しておかねばならず、その準備が大変だったのです。何しろ私の仏教理解やその用語法は独特でお手本がありません。すべて自分で一から考へねばならず、一つの用語、一つの

核問題をめぐる動きとその背景

日本原子力産業会議
専務理事 森 一久 先生 講述

ご紹介いただきました森でございます。今、津田先生のお話で頭の中をひっきりかきまわされまして、まだちょっと我に戻ってないもので、すから、少し支離滅裂なお話になるかと思いますが、お配りしたキーワードのようなものをご参考にしていただきたいと思います。

核兵器登場の背景

核兵器問題というのは、核兵器が人類の作った究極の兵器とも言えるところから、この問題を考えるということは、結局、人類の将来を考えることにもなるわけです。

広島、長崎に核兵器としては小さなものが落されてからすでに五十年、いまでは世界中で何万発という核兵器が蓄積されているわけです。四万発とも、六万発ともいわれますが、一つ一つの爆発力が違えば比較する意味はないんですが、要するに地球を何十回も壊してもまだ余るくらいのが蓄積されているといえましょう。アメリカ、ロシアが両国でほぼ四、五万発、イギリスが二百発、フランスが五百発とか中国が四百発とかいったところ

です。最近、核実験の問題がやかましく論ぜられています。中国の言い分としては、アメリカは千回も核実験をやっているが、自分たちはまだ五十回もやっていないのだから、少しくらいやるのは当たり前だということであり、フ

ランスも似たようなことを言っているわけですが、大体アメリカとソ連が千回くらい、イギリス、中国が五十回くらい、フランスが二百回くらい、実験をやっております。ただし

一九六三年に、米英ソの三国は部分的核実験禁止条約に調印し、それ以降は大気中でやることはやめまして、地下でやっているようです。フランスと中国はその後まだ大気中で、合計六十回ほどやっております。少し意地悪な言い方をしますと、六三年以降はアメリカとロシアは大気中でやる必要がなくなった、地下で充分やれるので、世の批判に答えて切り換えたということがあります。後発のフランスや中国はまだそこまでの能力や場所もないので、なりふりかまわず大気中で続けてきたわけで、しかし最近では段々減ってきたということだと思います。

さきの第二次大戦は、ある意味では人類の一つの大きな転換点であったと思います。この第二次世界大戦を機に、結果としてですが、植民地が非常に減ってきた、と同時に今度はいまの五つの国による核兵器の支配というのが確立され、今日まで続いてきたわけです。そこで思い返してみますと、すでに第一次大戦の後半から、戦争というものの中身が大変程度が悪くなったといえます。戦争道徳という言葉ほど虚しい言葉はないのですが、それでも大昔から、それなりのルールというものがあ

のがあったわけです。非戦闘員は意図的に殺さない、あるいは不意討ちの攻撃はしないとか、病院船を襲わないとか、そういうルールがあったわけですが、第一次大戦の後半から、それがずいぶん怪しくなってきました。

第一次大戦の直後に、チャーチルだったと思いますが、次の戦争、つまり第二次大戦ではすごい兵器がどんどん増えて（その時はまだ核兵器はなかったのですが）人類は滅亡するんではないかということ警告したことがありました。

それが第二次大戦になりました、大規模なルール違反が起ります。きっかけを作ったのは日本、ドイツの軍国主義者かもしれませんが、それに応じて、あるいは便乗して、あるいは止むを得ずかもしれないが、連合国側も同様の行為を繰り返してきたわけです。

こうして戦争道徳の退廃ないしルール無視ということが一気にエスカレートしまして、日常茶飯事になってきたわけです、まだご記憶にあらうかと思いますが、第二次大戦の最後の二年くらいは、ドレスデンからはじまりまして、東京空襲はもちろん、その他、一般人を殺すことを目的とした攻撃というものがあるように行われました。

その挙句が広島、長崎ということで終わったわけです。終ったというのは広島、長崎の原爆投下のために戦争が早く終わったといっているわけではありませんが、事実としてそうだったわけですね。何故広島、長崎を選んだのか、いくつかの理由がありますが、最大の理由は爆弾を落した近く、三・五マイル以内に人口密集地がある地点を選べという、なるべく沢山の人を殺せるような、落し方をしろという

ことで地点が選ばれたわけです。

回復されなかった「戦争道徳」

戦争が終りまして、いわゆる戦争裁判、東京裁判などがあつたわけです。その時のものさしは先程から申しております、非人道的と申しますか、戦争道徳の無視と申しますか、無警告攻撃とか大量殺戮とかいろんなことを言つて、それをものさしに載いたわけでございます。それはそれとして止むを得なかったと一応考えますが、ところが不思議なことに、その後、今後戦争ということを抑える、それまでの間の一つのルールを回復しようという試みが全く行われなくて今日に至っているわけです。ふつうでしたら、こういうことがあつて戦争裁判が行われたわけですから、今後はこういうふうにしようにと、それをお互いに守るように、国際的には監視することも考えようじゃないかということに話がいくはずだったのが、何故かそれはすつとばされてしまったわけです。それはやはり核兵器の出現と密接に関係がある、と私は思います。

つまり究極の兵器である核兵器によって、世界の秩序をたもととすれば、そういうルールは邪魔になるわけです。原水爆というのは無差別大量殺戮をしない使い方というのはできないわけですから、必然的に結局、自分で自分の首をしめるというか、核兵器を使えないという事態へ追い込まれてしまうことを恐れたことになりました。

戦争後は、いきなり東西対立があり、朝鮮戦争、それからベトナム戦争と続きます。戦争が始まったならば、多くの無事の民が殺されるのは、いつの間にか当たり前だということ

になってしまつて今日まできているわけです。実は昨日もフランスの大使館の人とフランスの核実験の話をしておりましたら、彼の言うには、第二次大戦が終つたあと、二千万人以上の人が殺されているがしかし、核兵器で殺された人は一人もいないんだと。彼は何が言いたかつたのかよく判らないんですが戦後すでに二千万人、三千万人の人が戦争で死んでいる、その大部分はいわゆる一般大衆です。ところが、我々はいつの間にか無神経になつて、最近のボスニア・ヘルツェゴビナの問題もそうですが、戦争が悪いんだ、戦争だからしょうがないというながら、何となく時間が過ぎていくわけです。

一方で、差別的撤廃とかヒューマニズムとかが叫ばれ、社会制度なども進歩しているわけですが、一般大衆が殺されることに對して、みんな、人間らしさをとり戻そうではないかということが一回も行われなくて今日まできた、これは一体どういうことでしょうか。グリーンピースなどが核実験の反對のためにボートを出して勇敢にやっているのはいいとして、「鯨がかわいそう」といったようなことに心が向くようにされ今のようなことに對し、自分で身を挺して何かをしようという気が起らないのはどういうことなのでしょう。

今の世界的支配体制の中で結局、人類全体が故意か偶然かマインドコントロールされて、すべてが戦争が悪いのだ、戦争がなくならなければ核兵器もなくならない、ではいつになったら戦争がなくなるのか、百年かかるだろうというようなことを言っているわけですね。その一方で、こういうことがどんどんエスカレートしているわけです。上杉謙信、武田信

玄の時代に、敵に塩を送るといった美談がありました。がそういうことは夢の夢、今はどこかへ行つてしまつて、人類全体が不感症になつたにも拘らず、核兵器、あるいは化学兵器もそうですが、凄惨なものを持っているという大変な状態に人類全体が置かれているというのが今日の姿だと思います。

—— NPT 無期限延長問題 ——

核拡散防止条約(NPT)が二十五年前(一九七〇年)に出来ました。それは五ヶ国が核兵器をもっているが、これ以上核兵器国を増やさないための条約で、日本でも色々な議論がされました。当時とくに心配されていたのは、日本と西ドイツの能力で、これを封じこめることが最大の目的だつたと思います。その中の条文に、二十五年経つたら、これを無期限延長するか、或いはやめるか、また期限を決めて延長するかという会議をしなければいけないというのがありまして、その二十五周年が今年やってきたわけです。その結果、無期限延長に落着きました。この条約は五ヶ国だけの核兵器の存在を認めながら新しい核保有国の出現を抑える、それが未来永劫にそうだとするのは片手落で、おかしいという議論もありました。日本も核被爆国という特別な経験から、核保有国を固定する無期限延長にはためらいもありましたが、結局賛成に廻りました。

この決定には二つの条件がつけられました。核保有国側は条件ではないと言つてますが、一つはCTBT(包括的核実験禁止条約)の締結、もう一つは五大国の核軍縮への努力。エックと核兵器非保有国へ平和利用の利益を

享受させているかどうかのチェックのため再検討会議をきびしくやるということでした。

しかし、フランスと中国は実験を続けています。両国の言い分は、米、英、口は実験をしないで核兵器をどんどん改良できる、自分たちは遅れているから、核兵器の改良や安全の保持のために、もう少し実験をしないと、同じレベルにゆけない、トータルでは米、口に比べて五分の一か十分の一しか実験をしていないというわけです。つまり米、口の優位が固定してしまうのは困るというのがフランスの考え方のようです。

米、口の力の均衡で世界の秩序が保たれている間は、ある程度アメリカに任せておくこともできたかもしれないが、ロシアがあればど弱体化してしまつて、スーパースタートが唯一つで、それに人類の運命を任せていいのか、自分の国はもとより、全体として責任をもつためには、核兵器の存在が許されている以上、それに対抗できる位の力をもちたいというのが彼らの論理なんです。私はフランスを弁護しているわけではありませんが、彼らの主張にも「三分の理」はあるわけです。

考えてみると、CTBT、核実験をやめることは核兵器をやめることは直接は関係ないんです。全く無関係という言い過ぎかもしれません。が、(実験できないということ、新しい核兵器が出てこないという意味で一つのいいルールといえましょう)あとには要するに核保有五ヶ国の問題です。私は頭から五ヶ国体制がいけないとは言いませんが、CTBTを実行するからNPTの無期限延長を了解してくれということになるわけです。これは国際交渉の積み重ねの中で色々

と議論したあげくにそうだったのであって、いわばワナに落ちこんだという感じがしないでもないわけです。

ところで先ほど司会の方からバグウォッッシュ会議について言及がありましたが、これは今から四十年前(一九五五年)に、核兵器を開発した偉い学者たちがその責任を感じて、カナダのパグウォッッシュに集まつて始めた会議で、ラッセル・アインシュタイン宣言に基づいて進められたものです。主として核兵器その他環境問題も含め、いかにして地球を救うかという会議で、今まで日本で総会が一回も開かれていなかったのですが、私は偶々広島に骨折つたわけです。そしてその帰りに「京都フォーラム」——(これは京都の学者の方々を中心に、人類の全体の問題、とくに次世代、核兵器、環境、人口その他の諸問題に喘いでいる地球をいかにして救うかということにアプローチしている大きな組織ですが)——このフォーラムに出席願つて議論しようということになったわけです。

私はバグウォッッシュも、京都フォーラムも聞き役に徹して出席し、そのあと出された報告書なども丹念に読んでみました。ところが先程から私が警告を発しようとしている事態に對する警告はどこにも見られません。米ソの深刻な対立の時は、政府間で直接話し合えず、このような学者の間で本音を出し合つて話し合う、つまりある意味では政府間交渉のテールプルの下のひそかな接触という役割があったと思います。

核兵器の廃絶に関しては色々な考えが出されてきました。たとえば核兵器の発射を数時

間違らせる機械をつけるとか、核兵器を内密に作っている国があつたら、その国民に国際社会に訴える責任をもたせるとか、その程度の話しで、全く無意味とは申しませんが、もっと基本的な問題にはアプローチできない状況です。北朝鮮のように、自分が核兵器を目の前につきつけられていて、それを自分が持たないのはおかしい、インドも同じことが言えます。インドはNPTにも加盟していません。そういう所からいかにして抜け出すかが今後の問題で、それを考えないでいつまでも戦争がいけないのだと言っていたのは何の解決にもならないわけです。やはり人間性の回復という本質的な問題に目が向くにはどうしたらよいかが課題だと思います。

—— 真の人間性とはどこへ ——

人間性とか道徳感というものは、個人と集団では違い、また時代によっても違います。今まで当たり前だと思つて見過していたことが、おかしい、変えてゆこうといったことは何度もありました。奴隷の解放にしても、環境問題でもそうです。自動車の排気ガスの匂いを文明の匂いだ、いい匂いだといっていた時もあつたのです。視点の切り替えが必要なのわけです。

京都フォーラムでは、中村元先生が、仏教の歴史とその平和性などを懇切に説明されて地球の環境（核兵器も含めて）問題にとりくむための一つの精神的拠り所として大きな役割を果たしているものであることを説明されました。しかし、外国からの出席者も沢山いましたが、宗教の間で悪口を言い合つていても仕方がないという程度のコメントしかなく、噛

み合わないままでした。

一方、科学についていえば、脳も心の構造も、ある部分ではすでに釈尊が予言しているようなことの後追いをしているわけですが、大分解つてきています。筑波大学の松本元先生が宗教の必要性などを説いています。結局人間（集団としても個人としても）が何十億年の間の経験を脳の中に蓄えているわけで、それも全部ではなく印象の深いものだけが残つてゆくわけで、その一つは渴愛、人に受け容れられたいという欲望、もう一つは生きてゆくこと、この二つを軸として、印象の深いことがDNAの中に記憶として残っているわけです。残っているものに対して色々な形の旗が立っている。その旗に合致すると、人間の意識の表層に浮びあがり、新たな行動がおきることになる。しかしテレビやその他いろいろなことに気をとられていると、我々は戦争で無差別に人を殺すのは当たり前だという考えに行つてしまうことにもなる。「いじめ」なども、友喰いをしていた動物の頃の記憶の残りかも知れません。

しかしDNAにはもつと立派なものも蓄えられてはいるはずなのです。それをどのように引き出してゆけばいいのでしょうか。もともと道徳にしても宗教にしても秩序の恢復あるいは人間活動への規範を与えるために、為政者や先覚者の方々が作つていかれたものだと思いますが、そういうものが新しく必要になる時代であつて、仏教のルネサンスということになるのではないかという気がします。そんなわけで日本仏教徒懇話会の方々に頑張つて頂きたいと思う次第です。

（以上）

（四面からの続き）

表現を英語に直すのに数時間も、ときには一晩中かかつてしまうことがあるのです。そんなわけで、講義と食事に出る以外、週七日のほとんどをホテルの自室（私が土牢と名づけたその地下室からは汚れた小さな窓をすかして上方に隣の大英博物館の陰気な壁の一角だけが見えます……）に籠つて、暗い電燈の下で辞書を引き、高校生なみの英作文をしてはポツポツとタイプを打つてゆくという生活で、たつた十週間ですっかり身体と眼を疲れさせてしまいました。

そんなわけで三月十七日に最後のセミナーを終えた時にはもうロンドン市内を見物して廻ろうという気力もなく、そうそうに十九日夕刻の日航機に乗り込んだのですが、ここでもまた妙な感じを味わうことになりました。機が離陸し、食事も済んだところで日本の二十日朝のNHKニュースがリアルタイムで機内のテレビに映し出されるのですが、その主な項目が（それ以外にも神戸の復興の風景とかいうのがあつたのですが）、曙と若の花が共に全勝で春場所中日を折り返した、というものののです。私はその余りの平和さに、一瞬、不安を感じたのです。大地震が起る直前に一瞬、それまでずっと続いてきた微少な地殻変動が止る、というあの感じですね。それから一睡りし、目が醒めて程なく成田に着いたのですが、そこはすでにその朝、例のニュースの直後に地下鉄に撒かれた毒ガスのニュースで大パニックの最中であつたわけです。

それ以後、私も御多分にもれず朝から晩までテレビで流されるオウム報道の洪水の中にどっぷり浸かつての毎日となつたわけですが、それまでオウム情報に免疫がなかったせいか、

つぎつぎに明らかにされる一連の事件にいちいち驚ろかされました。しかし、何にもまして私が最も驚ろいたのは、いや、むしろ戦慄したのは、オウム信者の着けるバッジ、坂本弁護士一家の誘拐現場に残されていたあの安っぽいプラスチックをオウムの人々がプルシヤと呼んでいる、ということを知ったときでした。私はまず、その偶然の符合に驚ろきました。私がロンドンで苦勞して喋つてきたことは、詮じつめれば、ひとえに、そのプルシヤについてであつたからです。

私はロンドンではもちろんこの数年来練つてきた件の「開放系の仏教思想史」を、満を持して開陳したわけですが、その原理をなす「開放系の神」、私たちの「これからの仏教」の学理となるべき「開放系の神」というのが、他ならぬプルシヤなのです。いや、正確に申しますと「開放系の仏教思想史」というのは、それに先行する私自身の「閉鎖系の仏教思想史」を、その「歴史性を貫く目的論的理性」であるところのその神が「自己を告知する」その過程と見做してそれを解釈していくものなのですが、その神は「閉鎖系の仏教思想史」の先頭をなす歴史上のブッダ（釈尊）にはるかに先行して、すでに「リグ・ヴェーダ」の「原人の歌」（紀元前一〇〇〇年ごろ）プルシヤとしての姿を現わしているのです。しかも、そのプルシヤは「千頭・千眼・千足を有す云々」という一見まことに奇怪な姿に描かれているのですが、その奇怪な姿は実は輪廓としては完璧でして、現に「閉鎖系の仏教思想史」はその輪郭を枠組を厳格にまもりつつその内に漸次内実を充填してゆくものと

（八面へ続く）

仏教の散歩路 7

バンコクの

中国系大乘仏教

木村 清孝

先頃機会を得て、一カ月間タイの首都バンコクとその周辺に点在する中国系大乘仏教寺院の調査・研究を行うことができた。今回は、そのときの印象記をもとに、タイの大乘仏教の、ひいては仏教そのものの現代におけるあり方の一端を考えてみたい。

「タイの仏教」といえば、テーラヴァーダ仏教、すなわち、少し前まで日本では小乗仏教と貶称されてきた部派仏教の中の上座部の仏教であるというのが常識となっている。確かに、その大部分は上座部系に属する。新興の仏教教団の主なものもこの系統である。けれども実は、タイにはかつて七―九世紀ころに大乘仏教がかなり浸透していた形跡がある。この伝統はやがて途絶えたが、十八世紀末からヴェトナム系(源流からいえば中国系)、前世紀後半から中国系の大乗仏教がタイに移植された。現在、ヴェトナム系、中国系とも十余箇寺を数える。では、それらの教団的な結束はどうであろうか。筆者が調査した中国系諸寺院に限って言えば、「泰国華宗僧務委員会」なる機関が後述するワット・ポマンクナラム(普門報恩寺)に置かれてはいるが、諸

寺院の間に緊密な連絡が日常的ないし定期的になされている様子はない。各寺院の活動の仕方は「本寺―末寺」的な系列関係にあるものを除けば、ほぼそれぞれの寺院の伝統と住職の力量および方針に任されているのである。無論このことは、中国系諸寺院に共通したところがあるということを意味するわけではない。例えば、おおむね禅宗の流れを汲むこと、漢訳経典を用い、広東語系の中国語で読誦すること、戒律(ヴィナヤ)の重視を通じてテーラヴァーダ仏教との調和を図っていること、托鉢はしないこと、道教や民俗信仰の要素を取り入れていることなどを一応の共通的性格として認めることができる。

さて、それらの中国系大乘仏教諸寺院の中で、いまバンコク市内に限定していえば、とくに強く印象に残った寺が四つある。

その第一は、上に触れたワット・ポマンクナラムである。これは、一九六〇年に創建された比較的新しい寺であるが、当初から政府・王族との結びつきが強く、中国系諸寺院の中で抜群の勢力を誇る。二代目の現住プラカーチャーニンチンタームサマーチワット師(仁得上師)も多く、の信者の尊崇を得て、現に北タイ・チェンライの北方に豪壮な大寺院、万仏慈恩寺の建立を進めている。

第二に、いわゆるチャイナタウンにあるワット・マンカラカマラウェアス(龍蓮禪院)が注目される。これは、百年以上の歴史をもつ伝統の寺院で、いまも広く、中国系を始めとする一般民衆の信仰を集めている。学校も経営し、僧と沙弥合わせて約七十人を抱える大寺である。しかし、住職に話を聞いたところでは、悩みは相当に深いらしい。とくに、

国のナシヨナリスティックな諸政策の中で、中国語を解する人が若い世代に激減してきていることを嘆き、適切な教育システムが必要なることを力説しておられた。

第三には、ククワンフツリム寺(覺園唸仏林)の場合である。この寺は僧二人だけと小さいが、最近信者の寄進によって建て替えられたという仏殿を含む二階建ての建物はかなり立派である。ところが驚いたことに、その資金はすべて中国の潮州(広東省)の信者たちの献金によっているという。住職がまれに近隣の信者の家に招かれることはあるものの、この寺の経済的基盤は、ほとんど完全に国外にあるというわけである。こうした実情について、住職がとくに強調しておられたのは、国の宗教政策による制度上、宗教活動上の制約である。タイの中国系大乘仏教の未来を極めて悲観的に語っておられたその姿が、いまも筆者の心に痛みを伴って残っている。

第四は、「観音仏宮」と名づけられる中国系寺院である。これは、霊驗力のある現住職の尼僧によつて開創されたものであるが、金色その他の色あざやかな仏像・菩薩像・神像が所狭しと置かれ、三階建ての宮殿のようなビルの一階中央は大きな仏具店となっている。観音信仰を軸に「現世利益」的な教化によつて急速に民衆の信仰を集めつつあることが、そのたたずまいからもよく分かる。ただ一つ感銘を受けたのは、この寺では僧と尼僧はまったく平等らしいということである。

以上のように、同じくバンコク市内の中国系大乘仏教寺院といっても事情はさまざまである。しかし、王族や政府とのパイプなしに、またテーラヴァーダ仏教との協調なしに、こ

れから中国系大乘仏教が生き残っていく道はなさそうである。問題は、その際に大乘仏教が根本の理念とする「利他」をどのようにしたら具体的に打ち出していけるかであろう。ワット・ポマンクナラムの住職は、筆者のインタビューのあと、「とくに話したいことがある」といって、清浄な日常生活の大切さと自己の内から仏が生まれることを説かれた。

これは、見事に禅宗の立場とテーラヴァーダ仏教の教義を調和させ、かつ現代化したものといえよう。けれども、思うに、この線に沿った実践のみから真の「利他」の願行が出てくるかどうかは、いささか疑問である。むしろ、「善堂」と呼ばれる在俗の中国系宗教信者たちの結社の活動の基幹とも見なしうる菜食主義(ヴェジタリアニズム)の運動に学び、これとの関わりにおいて慈悲や共生の教えを広めることが大切ではなからうか。ともあれ、いまタイの中国系大乘仏教の人々には、上述した課題を自らの切実な「公案」とすることが求められているように思われる。(以上)

(七面からの続き)

してあるのであり、サンヴァラ系密教におけるその完結においてその「開放系の神」が生きて働く姿を私たちに現見させるのです。

私はその大いなるプルシャと、現実の醜い小さなプルシャ・バジとの対照の極端さに驚きました。しかし、両者の間に存するこの最大の懸隔こそは、現在、私たち人間が原人、すなわち根源的な人間とされるそのプルシャから最も遠い位置に在ることを象徴的に示すものなのではないでしょうか。これこそは「開放系の神」の目くばせ(Wink)なのではないでしょうか。(終り)